

2022年 9月

マナ通信



今月のマナ通信

◎7月の週日の聖書日課：マルコの福音書、伝道の書、コリント人への手紙第1、他
◎土曜日・日曜日の学び：世界に広がる福音（使徒の働き）からの感想です。

神は何を望んで、何をお喜びになるのだろうか、私はあまり考えたことがなかった。それは神を愛していなかった証拠だ。ロマ書を学んでいるうち、自分の至らなさがわかった。クリスチャンだと云いながら、日常生活では自分中心であり、自分があるって神があると云う生活に陥っていた。

もっと神に関心を寄せるべきだ。もちろんクリスチャンだから、天地万物の創造主である神の存在を否定してはいない。むしろ、神があるからこそ、被造物である人間も存在しているのである・・・

自分中心のために信仰が空回りをしてきたのだ。偶像礼拝もこのような状態なのだとも思う。自分の為を神を利用する。それは神を見下していることになる。

そうは云うもののクリスチャンになって、集会へ行き神の話を聞き、聖書を読むことによって、自分自身は聖化されて来たことも感じる。でも、ロマ書を学んでみことばで自分を顧みるとき、なんとも頼りない自分がそこにある。聖霊によって教えられ自分の罪を自覚するようになったからだろうか。少しではあるが神の考えが解ってきた感覚もある。それは進歩だ。その証拠に、今まで犯して来た罪が時として頭をよぎる。とても切ない、とても悲しい、良心が悲鳴をあげる。今なら、そんなことは絶対にしないのだが。しかし、神様は今までの罪を全て帳消しにしてくれた。喜ぶべきである。

アブラハムは神を信じた。歳老いて子供など出来ない体であることを認識しながら、子孫が星の数に増えるという神の約束を信じた。

又、モリヤの山では、その一人息子であるイサクを神に捧げよと云う神の命令に背くことなく、イサクをいけにえとして捧げようとした。人間の常識を越えている。それでもアブラハムは神を信じた。（出来ることなら、自分も見習いたい）

神は目に見えない。その為その存在を信じ難いのだがアブラハムのように神を信じ、神がしてくれた約束を信じきることだ。自分を無くして全て無言で神にお願いすることだと思ふ。これがなかなか自分には出来ない。なぜか、それはやはり我が身が可愛いからだと思ふ。このような態度では神の前では通用しない。聖書が教えるように人間には出来ないことを神はやってくたさる。

神が、山よ、動けと云えば山は動く、神はらくだを針の穴を通す事が出来る。神には不可能はない。二匹の魚と五個のパンで、五千人の給食を作ることができる。又、神は死んだ人を生き返らすことができる。しかし、これらのことは、人間には出来ない。

ロマ書の学びで、アブラハムに教えられたのは、アブラハムは神を良く知っていて決して疑わなかった。今の自分は学びの面では納得しても、日常生活に於いては、自分があるって、神がある、自分のエゴが優先している。苦しみや、悲しみに負けてしまっていた。神様はなにもしてくれないように感じても全てご計画の元に導いてくれている。終わってみれば全て良き方向に導いてくれていることがわかる。

神様のわざは人間には解らない。で、あるから、もう迷わない。生きて働いている神は、人間の目じゃなくて、神の目でちょうど良いときに手を差し延べ、進むべき道を教えてくれる。人間には「絶対」は無いが、神には「絶対」がある。（畑中伸之）

人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます、彼らは、人の子を死刑に定め、異邦人に引き

渡します。異邦人は人の子を嘲り、唾をかけ、むち打ち、殺します。しかし人の子は三日目によみがえります。」（マルコ10:33-34）

イエス様は、人々の敵意と憎しみの中で引き渡されました。しかし、そこには父なる神様の御手があったのです。使徒2章23節には（神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを）とあります。人間の手によってではない、父なる神様がご自分の御手をもって、御子を十字架の死に渡されたのです。

私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。神が義と認めてくださるので（ロマ8:32）。

神様のこの「渡すみわざ」によって、私たちに恵みがもたらされました。神様は、そのように、私たちの生涯においても「渡すみわざ」をなさいます。神様は、私たちが試練や病気、苦しみ、悩み、さまざまなものに渡すことをなさるので。とありました。

そうした出来事に私は今まで どう反応してきたでしょうか。どのような仕方でそれに向き合ってきたでしょうか。問いかけられました。

慌てふためき、主よ、主よ、と信仰が吹き飛んでしまうような有様を思い出します。やがてみことばの光のもとで教えられ、励まされて来ましたことは確かです。

信仰の賜物が与えられますと、試みがあることは神様が許されることなのだ、ヤコブ書1章にも記されています。このたびの学びが出来て感謝です。（福島三弥子）



すると、イエスは答えられた。「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」弟子たちは言った。「私たちが出かけて行って、二百デナリのパンを買い、彼らに食べさせるのですか。」（マルコ6:37）

弟子たちは、人里離れた場所で大勢の群衆が帰らずに空腹になることを心配し始めていました。そんな困った事態にならないように、イエス様に「皆を解散させてください」と言いました。

それに対するイエス様の答えは、「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」です。これは無理な指示だと弟子たちは思ったのではないのでしょうか。「私たちが出かけて行って、二百デナリのパンを買い、彼らに食べさせるのですか。」とイエス様に聞きました。

その後、イエス様はわずかなパンと魚で奇跡を起こされました。

この場面で思うのは、弟子たちはいつでも素直にイエス様に質問しているということです。現実を見て心配になったら、イエス様に申し出る。そのイエス様に無理難題と思えることを言われても、それはこういうことですかと質問しています。

私のような人間だったら、イエス様に「はい、やってみます」と返事だけして陰で「そんなの無理だ」と愚痴を言うと思います。イエス様の御前で素直になり、あらゆる思い煩いを素直に打ち明け、自分自身で考えた対処策を一旦わきへ置くことが、イエス様の介入による最善の道を歩むことにつながるのかなと思います。（永井亮子）





+ 十字架を負うと言うと、自分のような取り柄のない平信徒にはできないと、思ってしまいます。

伝道者 宣教師の様な人たちに関係する事だと、考えていました。たとえ力の無い信者でも主から託されている十字架を負う役目が、期待されているのだと、気づかされました。

毎週礼拝に出席することも広い意味で、十字架を負うと言ってもいいでしょう。もっと重いものを負わなければならなくなった時には、逃げずに従える信仰をもちたいと思います。神様が負えるように助けて下さるという約束があるので、感謝です。

伝道の書7章15節は、よく未信者の方から、また私自身も心に浮かぶ思いです。悪が栄え、善人が辛い思いをするのは、納得がいきません。89頁10行目に「世界は因果応報の原則で動いている、と言う幻想を捨てるように勧めている」とありました。神様の御旨は私たちには明かされていません。

私に今できることを背負って、主に従って歩むほかないのです。必ず主の平安を見つけ出せると確信が与えられているので、心強いです。(広瀬裕子)

さ て、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに「モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われぬ」と教えていた。それで、パウロやバルナバと彼らの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバ、そのほかの何人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。こうして彼らは教会の人々に送り出され、フェニキアとサマリアを通して行った。道々、異邦人の回心について詳しく伝えたので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした。エルサレムに着くと、彼らは教会の人々と使徒たちと長老たちに迎えられた。それで、神が彼らとともにいて行われたことをすべて報告した。

ところが、パリサイ派の者で信者になった人たちが立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、モーセの律法を守るように命じるべきである」と言った。(使徒15:1-5)

パウロたちの第1回と第2回伝道旅行の間の出来事が記された文書です。

「教会の将来の発展のために重要になっている」文化の違い、言語、国、歴史、気質も習慣も違う様々な国の人々が互いに集まって1つのことに取り組もうとする時、その過程で乗り越えなければならない困難や行き違い、誤解も生じることがあります。

「回心した異邦人は、主イエスを信じるだけではなく、なお割礼を受け律法も守らなければならないのかどうかという問題」を取り扱っています。

「『主イエスを人となられた神である』と信じてクリスチャンとなったのに、さらに、救われるためにしなければならないことがあるのか」という問題です。まったくありません。

しかし、文化の違う人たちが、同じ1つの福音を信じて共に集会する時、互いに配慮し合って信仰生活を送ることの大切さを教えていただいています。

現代にも通じる問題であると思います。信仰は1つでも生活の様々な点で違いがあります。けれど互いは理解し合わなければならないのだと思います。

主よ、あなたの救いの喜びを私にさらにお与えください。(木村邦夫)



ロ イドジョンス兄の以下の文章で教えられたことがあります。

「多くの人は老いを恐れ、精神機能や諸力の衰えを恐れている。しかし、あなたの肉体がいかに衰えようと、主イエス・キリストとあなたの関係には、何の影響も及ぼさない。あなたはキリストにある者であって、からだの故障や衰えなど、何の問題にもならず、『いかなるものも決して、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことはできない』からである」。

神の敵であった私が、キリストの贖いを信じた故に、神が私と和解してくださり、今、神の愛の中にある。それはとてもうれしくありがたいのですが、それはそれとして、高齢の身になって体の面、知能知識の面では衰えを実感するようになり、あれこれ気をもむこの頃ですが、ロイドジョンス兄の次の文章で、目の向けどころを正されたように思います。

人は年とともに衰えるのは避けられないが、人にとって最も大事なものは神との関係であり、神の愛の中にあるかどうかなのだ。それはからだの変化や衰えとは比べ物にならない大事なことなんだ、と。

(高橋美枝)

イ エスは弟子たち答えられた。「神を信じなさい。まことに、あなたがたに言います。この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言い、心の中で疑わずに、自分の言ったとおりにになると信じる者には、そのとおりになります。ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」(マルコ11:22-24)

今年は、家庭菜園をプランター栽培から地植えにしました。水不足解消のため、水やりを少しでも控えることができるのではないかと、兄弟が考えてくれました。

また、家の中で、ハイドロボールを使っての水耕栽培を試みています。1500ccの水に、ハイポニカ液体肥料A液3cc、B液3ccを加えて溶液を作ります。双葉が芽を出し、本葉が出るところまでは育つのですが、地植えのように上手く育ちません。

LEDライトを使用したり、あれこれと工夫しますが、「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。」(コリント3:6) 私たちの思いではなく、神に委ねることが大切であることを覚える今日この頃です。(外處トミ)

え き ひ
種を蒔き 液肥与えて 栽培す
豊かな実り ただ主に願う

2022年7月31日



千葉公園の白いアガパンサス

すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3:6)

主は私達の人生におけるあらゆること、全てをご存じです。私達にとって何が大事で何が必要か、全てを知っておられます。毎日を過ごす中で、主が私達をいつも気にかけてくださることを、いつも忘れないように歩んでいきたいです。(外處光歩)

とれから、群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」(マルコ8:34-35)

私のために十字架を負ってくださったイエス様に感謝します。自分のことで終始しがちな私を恥じ、聖霊の助けを祈り求めます。主に信頼して歩んでいけたら幸いです。(外處結実)

心の中で疑わずに、自分の言ったとおりになると信じる者には、その通りになります。ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」(マルコ11:23-24)

神様は私達を愛して下さっているのです。私達の願いを御心にかなう範囲であれば、可能な限り実現して下さいと思います。与えられないのは求めないからとも聖書には記載されています。求めないのは、神様に信頼していないことであり、信頼していないのは神様を本当に信じてはいないからなの

だと言えるのかもしれませんが。

つぶやかないで、ただ神様の大きな愛を信じて、その愛を心の中に満たして下さいと求め続けたいと思います。決して、この世に絶望して、「死んでしまいたい。」などと間違っても神様に求めないように気を付けなくてはなりません。

神様は私達を愛されているので、御心に叶^{かな}ってしまうこともあるような気がします。この世に置かれている限り、神様の栄光を現わせるように導いていただきたいと思います。(外處徳昭)

まて、彼らはゲツセマネという場所に来た。イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい。」そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネと一緒に連れて行かれた。イエスは深く悩み、もだえ始め、彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにおいて、目を覚ましていなさい。」それからイエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られた。そしてこう言われた。『アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。』(マルコ14:32-36)



主はペテロ、ヤコブ、ヨハネと一緒に連れて園の奥の方まで行かれました。そこで、主のきよいたましいは、どうしようもないほどの重荷に圧倒されました。私達のために「罪のためのいけにえ」となることを予期されたからです。

罪のないお方が私達のために罪とされる、ということが、主にとってどのようなことを意味していたのか、私達には理解することができません。

主はその3人の弟子たちに「ここにおいて、目を覚ましているように」と命じられ、彼らから離れて行かれました。それから、イエス様はひとりて園の中に少し進んで行かれました。私達の罪に対する神の恐ろしいさばきをお受けになるためです。

イエス様が地面にひれ伏し、父なる神様に祈っておられる姿を見るのは、不思議なことであり、また、驚くべきことだと思います。

「十字架」から免除されたいと願っておられたのでしょうか。決してそうではありません。主はそのことのためにこの世に来られたのです。

主はまず、「もし、できることなら、この時が自分から過ぎ去るように」と祈られました。ご自分が死に、葬られ、復活するという方法以外にも、罪人たちを救う方法が、もしほかにあるなら、父なる神様にその方法を示してもらおうとなさったのです。しかし、天からの声はありませんでした。私達を贖うことのできる方法は、ほかになかったのです。

主は再び次のように祈られました。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください」

イエス様が神様を「(愛する)父と呼んでおられること、そして、「おできにならないことはありません」と言っておられることに注目したい。

不敬虔な罪人たちを救うためには、救いの土台になるものが必要でした。全能の御父は、ほかにそのようなものを見いだされたでしょうか。天の沈黙が、ほかに道がないことを示しています。聖なる神の御子が血を流さないかぎり、罪人たちが罪から解放される道はなかったのです。

父なる神様のみこころ、そのみこころに従ってくださった御子のイエス様。ありがとうございます。(福島勲)

貴重な感想ありがとうございました。

今回はマナ8月号の感想を9月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(畑中)